九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Secondhand Smoke and Streptococcal Infection in Young Children Under Japan's Voluntary Tobacco-Free Policy

藤田, 貴子

https://hdl.handle.net/2324/4474972

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

（別紙様式２）

氏　　名	藤田　貴子
論　文　名	Secondhand Smoke and Streptococcal Infection in Young Children Under Japan's Voluntary Tobacco-Free Policy
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　大賀　正一 副　査　　九州大学　　教授　　鴨打　正浩 副　査　　九州大学　　教授　　林　哲也

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本研究では、小児における受動喫煙と溶連菌感染症の関連について評価した。全国健康保険協会福岡支部のレセプトデータと健診データを使用し、4歳未満の喫煙状況の明らかな被扶養者5,743名を対象とした。受動喫煙は被保険者の2011年度から2014年度の喫煙状況により定義した。目的変数は、溶連菌感染症の診断とし、診断のための検査の有無も考慮した。溶連菌感染症の診断があった者は4.2%（244人）で、うち約6割は検査なしに診断が行われていた。ロジスティック回帰分析を行った結果、溶連菌感染症の診断は受動喫煙のある場合の方がない場合よりも有意に高かった(OR 1.39, 95%CI 1.07-1.80, P<0.05)。検査を受けて溶連菌感染症が診断された場合を診断ありとした場合、受動喫煙による有意差は認められなかった(OR 1.20, 95%CI 0.80-1.80, P=0.39)。

本研究により、受動喫煙と溶連菌感染症の関連が示唆され、受動喫煙が小児へ与える影響について新しい知見を得ることができた。このことから、公共の場だけではなく、家庭内も含めたタバコ対策を検討していくことが今後必要であると考えられる。

以上は、受動喫煙と乳幼児の溶連菌感染症が関係する可能性をはじめて示唆した意義あるものと考えられる。本論文の試験は、研究の背景、目的、方法、結果とその解釈に説明を求めた。各調査委員より、溶連菌感染症の感染経路、保菌者と発症者の病理、解析集団の抽出、統計経学的解析法など、論文内容と関連事項について種々の質問を行い適切な回答を得た。調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。